

その男のおつかあも、愛嬌のよい女だった。家内中の人達に歓待され、さて寝ることになり、その主人は「せっかく伊達から案内して来たんだから、あの一番よい絹の布団を出して、寒くねえようにしろよ。金は明日の朝あげるから安心してねっせえ」と、立派な絹布の布団に寝せられたが、何だか身体がすべり落ちるようで、絹布の布団とはこんなにすべるものかと、その都度はい上っては寝たが、ぐっすりは眠れなかった。

そうした一夜もようやく明けた。気がついてみたら、山の斜面の大木の根っこの上に木の葉を敷いて寝ていたのだった。昨日の主人も家族も家もない。おれは狐にばかされたんだとようやく気がついたが、困ったのは自分が今いるのはどこなのか。どこを見ても見たことのない山ばかりで、どっちへ行ったら帰る道に出るのか、人家のある方角はどちらなのか皆目わからない。とにかく、窪の水の流れに沿って行けば里に出れるだろうと、夢中で沢を下って行ったら、小さな畑に大根が作ってあったので、その大根をかじりながら下って行くと、人家があったので聞いてみたら、そこは飯坂村（現在川俣町）萩平だったという。連れて行かれたところは相馬境の山だったのである。

留守宅では、大騒ぎの最中。ぼう然とした格好で帰ったのは夕刻だったという。その一昼夜に七やんは、五才も六才もふけて見えたということであった。